様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２１年　５月８日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８５２０５８３
研究課題名（和文）朝鮮三国時代の墳墓における棺・槨・室構造の特質とその変遷

研究課題名（英文）　A Study on the structural feature of coffin, compartment protecting coffin, and chamber in the Three Dynastic Period of Korea.

研究代表者
吉井　秀夫（YOSHII HIDEO）
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：90252410

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：三国時代・朝鮮・棺・槨・室・墓制

１．研究計画の概要

朝鮮半島の各地に高句麗・百済・新羅や加耶諸国が並び立ち、覇を競い合った三国時代は、地域ごとにさまざまな特徴をもった墳墓が盛んにつくられた時代でもあった。これまでの研究により、この時代の墳墓は、おおむね木棺墓→木槨墓→竪穴式石槨墓→横穴式・横口式石室墓、という順序で築造されたことが明らかにされている。しかし、これらの墳墓の名称に用いられている「棺」・「槨」・「室」という用語は、明確に定義されずに用いられてきた。その結果、実際の構造や性格が大きく異なる埋葬施設が、用語の共通性により関連づけられるなど、墓制の時空的な変遷を理解する上で、さまざまな問題が生じているのが実情である。

そこで本研究では、墳墓資料の実態を整理して、朝鮮三国時代の墳墓における棺・槨・室の概念の再定義を試み、その具体的な構造の地域性と変遷を明らかにすることで、三国時代墳墓研究に新たな視角を提供することを目的とする。具体的には、（１）「棺」構造の復元と、その特質の解明、（２）「槨」構造の特質の検討、（３）「槨」から「室」への変遷過程の解明、という３つの課題に取り組むことを計画した。

２．研究の進捗状況

この３年間における研究の進捗状況を要約すると、以下の通りである。

（１）百済地域における横穴式石室の出現展開過程と、棺の構造・機能変化に対する検討

最近、調査例が増加している漢城期百済の横穴式石室の特徴を検討し、棺の構造・副葬品の組み合わせ・被葬者数などにおいて、熊津期百済の横穴式石室とは大きな違いがあることを明らかにした。特に棺は、先行する土壙木槨墓や竪穴式石槨墓のものと構造的・機能的に共通することを明らかにした。

（２）新羅・加耶地域における竪穴系墓室における棺・槨の再検討および、横穴式石室の出現過程の検討

出土した釘・鋲やその他の痕跡を手がかりとして、新羅および加耶諸国が位置した洛東江流域に築造された竪穴系墓室内部に存在した木製構造物の復元を試みた。その結果、木槨や竪穴式石槨の内部には、被葬者を保護し、副葬品の配置空間と区別する構造物があり、機能的に「据え付ける棺」として評価できることを確認した。また、洛東江以西地域における出現期横穴式石室を分析した結果、石室の構造および棺の構造・機能には多様性があり、新羅系横穴式石室が広がる６世紀中葉以降、「開かれた棺」の使用が一般化する、との見通しを立てることができた。

（３）植民地朝鮮における考古資料撮影技術の考古学史的検討

今回の研究を進める中で、植民地朝鮮において日本人が調査研究した古墳の再検討が必要であり、特に写真資料の再評価で重要であることに気がついた。そこで、研究代表者の勤務する京都大学考古学研究室に残された未公開写真資料や、韓国・成均館大学校博物館所蔵の藤田亮策旧蔵ガラス乾板を検討対象として、植民地朝鮮における考古学調査において、どのような歴史的背景のもとでそれらの写真が撮影されたのかについての基礎的な検討を進めた。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

３年間の研究では、主に検討資料が豊富な朝鮮半島南部（百済地域・新羅・加耶地域）の墓制を対象とし、棺・槨・室の復元と機能の推定を通して、その変遷を整理してきた。その結果、横穴系墓制の出現を契機として槨墓から室墓への変化がおこり、棺の機能も変化することを明らかにできた。また、被葬者を安置する空間を確保する槨や室の構造は、外的要因により変化しやすいのに対して、被葬者を保護し、他の空間と区別する機能をもつ棺の場合は、ある段階まで従来の伝統を維持する傾向があることが、地域・時期を越えて確認できた。

こうした成果は、埋葬施設の変化を、集団の移動や地域間関係の変化の反映と解釈する場合が多い従来の研究は、再考されねばならないことを意味する。そしてこうした実証的な検討作業の実践により、墓制を通した社会構造の復元をおこなうためには、棺の構造と機能の変化のあり方や、副葬品の埋葬パターンなど、墓制を構成する諸要素を総合的に検討することが必要であることを示すことができた。

４．今後の研究の推進方策

３年間の研究を通して、新たな視角から朝鮮三国時代の墳墓の変化の大枠を把握することができた。残り１年間を通して、地域ごとの具体的な変遷過程についての整理と、地域間の影響関係の整理検討を進める必要がある。また、朝鮮半島における墓制の変化は、日本列島における墓制の変化とある程度連動しているのではないか、という見通しも得ている。資料の不足から十分な検討ができていない朝鮮半島北部の墓制の検討と合わせ、同時代の東アジア世界における墓制の変動との関連性について、詰めの検討を進めていく必要がある。

今回の検討を通して、新たに研究を進める必要があることに気がついた、植民地朝鮮における写真撮影技術の検討については、今回の研究期間で、その全てを解決することは困難である。残された課題について整理をし、次の研究費補助金の課題として申請できるよう準備を進めたい。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①吉井秀夫、「考古学から見た百済の国家形成とアイデンティティ」、『東アジア古代国家論－プロセス・モデル・アイデンティティー』、査読無、2006 年、166-186 頁

②吉井秀夫、「古代東アジア世界からみた武寧王陵の木棺」、『日中交流の考古学』、査読無、2007 年、406-415 頁

③吉井秀夫、「日帝強占期石窟庵の調査および解体修理と写真撮影について（韓国語）」、『慶州新羅遺跡の昨日と今日－石窟庵・仏国寺・南山－』、査読無、2007 年、198-209 頁

④吉井秀夫、「墓制からみた百済と倭－横穴式石室を中心に－」、『百済と倭国』、査読無、2008 年、117-136 頁

⑤吉井秀夫、「澤俊一とその業績について」、『高麗美術館研究紀要』、査読無、第６号、2008、77-89 頁

〔学会発表〕（計９件）

①吉井秀夫、「日本における武寧王陵研究史」（韓国語）、武寧王陵発掘 35 周年記念及び新報告書発刊のための武寧王陵学術大会、2006 年 11 月 24 日、国立公州博物館

②吉井秀夫、「日帝強占期慶州新羅古墳の発掘調査」（韓国語）、国立慶州文化財研究所学術シンポジウム　新羅古墳発掘調査 100 年、2006 年 12 月８日、国立慶州文化財研究所

③吉井秀夫、「横穴式石室からみた古代朝鮮半島と北陸」、シンポジウム継体大王とその時代－渡来文化と横穴式石室の受容－、2007 年 10 月 13 日、福井県立大学

④吉井秀夫、「横穴系墓制を通してみた６世紀の加耶と周辺諸国」（韓国語）、第 14 回加耶史国際学術会議　６世紀代加耶と周辺諸国、2008 年４月 25 日、国立金海博物館

⑤吉井秀夫、"Photography and Archaeology: The Re-construction of Sokkuram in early twentieth century Korea"、Fourth Worldwide Conference of the SEAA、2008 年６月４日、中国社会科学院